

群馬社会福祉大学図書館報



昌賢だより

第16号(2009.12.1)

発行：群馬社会福祉大学図書館

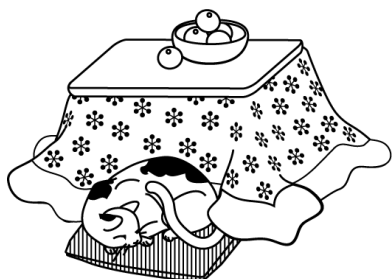
群馬社会福祉大学学生図書委員会

— 巻頭言 —

『世界は「価値観の大きな転換期」にある』

— 金融恐慌から学ぶもの —

学部長 石橋俊一

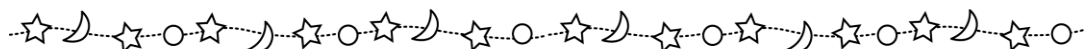


ありふれたことだが、「読書は知識の宝庫だ」と言うのが私の持論である。時として関係する専門分野の図書に片寄りがちになることがあるので、福祉問題即生活問題、生活問題即社会問題という視点を忘れないようにし、幅広く読書することに心掛けている。そこで最近読んだ本で大変参考になり、刺激を受けた本を紹介しよう。

その本は、文春新書刊の神谷秀樹(みたにひでき)氏の「強欲資本主義ウォール街の自爆」と言うタイトルの著書である。帯タイトルが“世界バブル大崩壊「失敗の本質はこれだ！」”として、今日の世界金融恐慌の具体的な姿をアメリカのウォール街に焦点をあて著述している。同氏は75年、早稲田大学卒業後、住友銀行を経て84年にアメリカのウォール街で従事し、92年にロバーツ・ミタニ・LLCを創業し活躍している人であるだけに説得力がある。注目されるのは、ウォール街の実態をえぐり出しながら、“何のための「成

長」なのか”のサブ・タイトルの中で、『日本のような繁栄した国でも、「姥捨て山」と化した老人ホームを「終(つい)の棲家(すみか)」とし、家族に看取られないでひっそりと亡くなっていく老人がたくさんいる。老人ホームにも入れずに小さなアパートで孤独死し、死後だいぶ時間が経って発見される悲惨な話も枚挙にいとまがない。これが世界でもっとも成長した国の実態である。』と喝破している。そして序章の最後で、『現在一般の人々(普通の勤労者やその家族)が見直しているのは、日本では「勤労を重んじ、信用を旨とする」ような伝統的な価値観に添ったものであり(中略)、いま世界経済は、人々の価値観の大きな転換期にさしかかっているのだと実感している』と述べている。私はここに大きく共感した。即ち「人々の価値観の大きな転換期」とは、換言すれば本学が校是としている“豊かな人間性の涵養”(知行合一)に相通じるものがあるからである。

— 先生からのおすすめ本 —



「笑顔」で介護

昨年4月本校に着任当日、玄関に入ったとたん「笑顔」「笑い」の文字が眼にはいってきた。ボランティア標語である。それは、私に安心と親近感をもたらしてくれた。3月までの職場が、「笑わないと退院できない」といってはばからない病院であったからだ。



その病院の理事長中島英雄は医者も出来る作家桂前治である。病院には本格的な寄席があり、月に1回病院寄席を開催している。

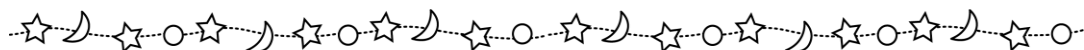
その中島の著書『脳を活性化する「笑い」の力』では、「笑い」を単なる楽しいから「笑う」だけではなく、血液、脳波などで種々の実験をし、その効果を科学的に証明しているのである。その結果「笑い」は自然治癒を上げ、脳の活性化と癒しの効果を同時

に起こす」と結論付けている。また「笑顔は相手に安全と安心と信頼をあたえるメッセージである」と言っている。そして、作り笑いでもよく、「笑い」顔にするだけで、顔の表情筋が脳内の神経回路を刺激し、笑いと同じ効果があるというのである。

福祉の現場に安全、安心そして癒しの場を保障することは介護福祉士の使命である。

「笑う」「笑顔」の効果を理解し、意図的に活用し「笑い」のある生活の場をつくり上げる学生を育てたいと思う。

	著者：中島英雄	
	出版社：小学館 ホーム・デコ・ボックス	
	推薦者：多田出洋子（准教授）	





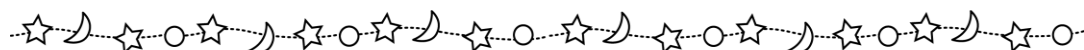
『フェルメール全点踏破の旅』

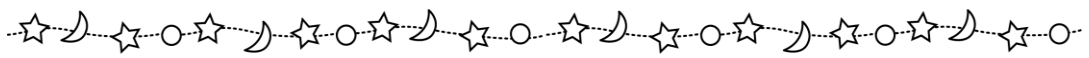
ヨハネス・フェルメールについては特に紹介するまでもないが17世紀のオランダ絵画の巨匠であり、「光の天才画家」と呼ばれる反面、現存している作品が少なく、「謎の画家」とも呼ばれている人物である。現在、確認されている作品は36点といわれているが、そのうち1点（合奏）は盗難に遭い現在は所在が不明となっている。また、その真贋が問われているものが数点あることも事実である。

このフェルメールの作品を巡って旅することを「フェルメール巡礼」と呼び、フェルメールファンの夢ともなっている。当然のことながら全世界に散らばったフェルメールを巡ることはそう簡単なことではない。しかし、この夢をかなえてくれるのがこの「フェルメール全点踏破の旅」である。

「フェルメール全点踏破の旅」はフェルメールの作品の解説と作者の行程記から成る本であるが、フェルメールの魅力を感じることができ、その巡礼の旅に誘われる魅力的なものである。実物6点の観賞しか終えていない私にとって、さらなるフェルメールの魅力を教えてくれるものであった。是非読んでいただきたいというより、是非見て感じていただきたいというのが正直なところである。

	著者：朽木ゆり子	
	出版社：集英社新書ビジュアル版	
	推薦者：高橋一公（准教授）	

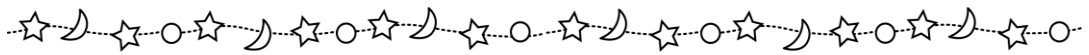
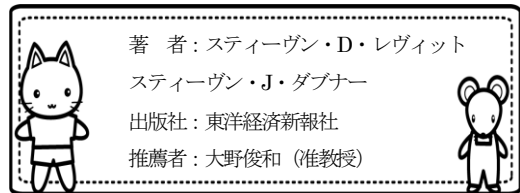




『ヤバい経済学』

アメリカで 170 万部を売った、笑えてしかも極めてまっとうなビジネス・経済学書です。よくある教科書的な小難しい本ではなくて、私たちの身近で起こっている事柄(時にはどうしようもなくトリビアな事柄)を経済学のロジックと数量データを用いて調べたものです。世の中のシステムには様々なインセンティブ(人の行動を変えさせる誘因)があるのですが、インセンティブ構造に問題があるときに不正やインチキが生まれやすいことを、興味深い実例を挙げて明らかにしています。例えば、日本の大相撲のシステムだと幕内と幕下とで全く力士の待遇が天国と地獄ほど異なります。そのため、7勝7敗の幕内力士が千秋楽で迎える一番は、通常が一番のインセンティブとは異なり、八百長が生じやすくなります。実際に、筆者は相撲の過去データを詳細に検討し、千秋楽で7勝7敗の力士が8勝6敗の力士に対する勝率は約80%であること、同じ相手

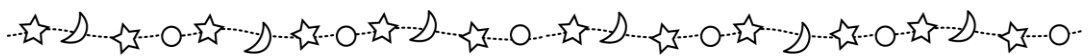
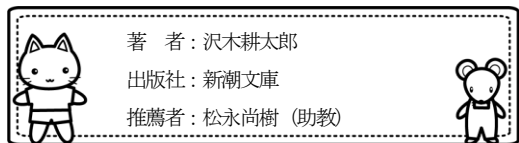
と次に当たった場合には逆に勝率が40%にまで落ちること、次の次に当たった場合には、勝率は期待値通りになることを明らかにしています。他にも、環境良好とPRされた不動産物件は確かに環境だけは良いが他は平均以下である場合が多いこと、90年代後半のアメリカの青少年による凶悪犯罪率の低下は、割宍理論の実践や景気の好転、警察の取締り強化によるものではなく、全く関係ないトホホな出来事から生じていることを丁寧に解説しています。翻訳の文章も読みやすく、価格も手頃なのでおすすめです。

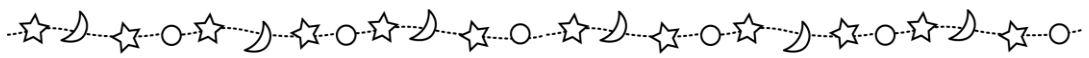


『深夜特急』

ふと旅にでたい気分になったことはありませんか？この夏、ある書店に立ち寄るとこの本はあった。10年以上も前この本に出会った。深夜特急 第3便のあとがきに「もし、この本を読んで旅に出たくなった人がいたら、そう、私も友情をもってささやかな挨拶を送りたい。恐れずに。しかし、気をつけて。」とある。筆者である沢木耕太郎が26歳のとき、仕事を投げ出して香港、マカオ、タイ、マレーシア、シンガポールを経て、デリーからロンドンまで旅をするというものだ。自分自身を見つめなおす、生と死を考えるとといった旅のなかで様々な経験をするという内容である。学生時代の今、学生の皆さんには旅に出てもらいたいと思う。社会人になれば

学生時代と違って時間的余裕がなくなってしまう。今はわからないと思うが、学生時代にもっと様々な経験をしていればよかったと感じるときが必ずくることになる。この深夜特急は1便から6便まであるが、数ページ読めば旅の世界に引き込まれる。それはこの本がノンフィクションであるからかもしれない。この本を読むと必ず旅に出たいという気分になる。もちろん、旅に出る場合には保護者と学校には届け出を出して行ってください。よい旅を。





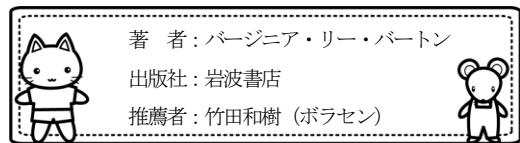
『ちいさいおうち』

このおはなしは、静かな丘の上に、小さいお家が建っていて、しあわせに暮らしているところから始まっています。小さいお家は、いつも変わることなく、夜や昼、季節の移り変わりを眺めています。周囲は少しずつ変わっていきまいます。やがて、小さいお家の周りに道路や建物が出来て、それから、高層ビルに囲まれてしまうと、月夜にダンスをするリンゴの木もなくなって、いつ春や夏がきたのか、いつ秋でいつ冬なのかわからなくなってしまします。人々は忙しくかけまわり、空気は汚れ、騒音の中で、小さいお家に住む人さえいなくなりました…

この絵本の特徴は、ずっと小さいお家を中心にし

た構図で描かれていることです。小さい家は変わりませんが、家の周りが見えなくなっていくのが子どもの目にもはっきりとわかります。

大人になってから読み返してみると、この絵本から「あなたにとって大切なものは何ですか？」と訴えかけられているように感じます。日々の忙しさの中で忘れてしまっているあなたにとって大切なものを思い出させてくれる一冊かもしれませんよ。



— 本と私 —

学生の皆さんにおすすめの本や読書観等をおしえていただきました。
この機会にお薦めの本を読んでみてはいかがでしょうか？



— 私たちの本選び —

大学：2C 志賀郁子 / 小森谷瞳

私は病院のボランティアで本の読み聞かせをしています。小児科の外来で行っているのですが、小児科は乳児から中学3年生まで受診して来ます。幼児から小学校の低学年が読める本を選ばなければいけないので、なかなか本を選ぶのが大変です。また、男女によっても本の内容に差があります。たとえば、男の子の場合、乗り物の本やカブトムシといった昆虫の絵本を読むことがあります。女の子の場合は、感情移入しやすい物語を読みます。

年齢に問わず読まれる本は、『ねずみくんのチョコッキ』です。この本は、文が短いけれど、絵を見ても楽しめる絵本なので、絵によって訴えかけられるものがあります。本によって考えさせられることが多

いので、もっと多くの人に読んでもらいたいです。

私はどんな本を読もうか迷ったとき、まず初めに惹かれるのは本の表紙のイラストです。表紙のイラストは、色鉛筆で描かれていたり、写真が載せてあるものだったり、題名だけが大きく書かれているものだったり、色やレイアウトなどさまざまなものがあります。その中から、興味を惹かれたものを手に取り、あらすじを読みます。また、表紙以外にも好きな作家の本を手にも取ります。たくさん本の中から自分の好きな本や読みたいと思う本を見つけることは難しいですが、これからはさまざまな本に出会い、多くの本を読めたらいいなと思います。





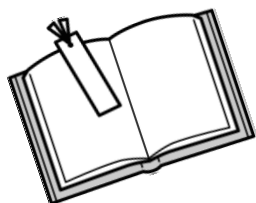
— 『静かなる愛』を読んで —

大学：2D 中村彩花 / 古里侑子

私たちは、中村雪江先生が著者である『静かなる愛』についての感想を述べていきたい。

この著書との出会いは、社会福祉援助技術論Ⅰの授業で中村先生が紹介してくれたことがきっかけだった。著書の内容は、当時先生が病院でソーシャルワーカーとして長年従事していた時の体験を記録したものであった。入院している高齢者や病氣・障害を抱える人々への援助の過程を鮮明に記しており、患者たちの悩みや不安などを傾聴し、その問題に対して共に解決していく姿に心を打たれた。また、患者と家族で意見が食い違っている場合、ソーシャルワーカーとしてどのような対応をしたら良

いか、各専門職とどのように連携し、患者のニーズに応じていくのかなど多くのことを学んだ。ソーシャルワーカーとして働くということは、利用者や患者に寄り添い、避けることのできない問題にも立ち向かいながら一人ひとりとの関係を築いていくのだと感じた。自分が想像していた以上に重要な役割を果たし、なくてはならない存在だと気付いた。私は将来、高齢者施設で仕事がしたいと考えている。著者を通して、ボランティアに取り組む姿勢が変わり、この知識を今後活かしたいという気持ちが強くなった。



— 本が教えてくれたこと —

大学：1A 加藤潤 / 鈴木絢子 / 斉藤明日菜

中学一年生の時、私は一冊の本と出会いました。その本は、脳性マヒという障害を抱えた男の子が懸命にその人生を生き抜いたというお話で、家族や先生との絆についても深く取り上げられている作品でした。「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい」という題名がつけられていたその本は、私が福祉の世界に興味を持つきっかけとなった本でもあります。

この本に惹かれたところは題名で、何故生まれてきたことを謝らなければならないのだろう、という強い感情を抱いたことをよく覚えています。そして読んでいく内に、脳性マヒという障害を持つ一人の人間の美しい生き方、そして、謝らせているのはこ

の社会全体であった、ということを知りました。

生まれてごめんなさい、と誰かに思わせるような社会であって欲しくはないし、自分自身そんな感情を抱かせる人間でありたくないと思うので、まずは一步一步自分の将来の目標に向かって歩いていきたいと思います。そして、この本の最初の謝り書かれているように、やさしさこそが大切で、悲しさこそがうつくしい、そんな人の生き方を、私もしていきたいと思います。





— 本を読むという事 —

短大：1B 小林美里 / 千田瑛子

あなたは、大学生になってから、自分が興味を持った本を読みましたか？

本を読むときに何を基準に選んでいますか？小学生のときは、いつも当たり前のように本を読んでいたが、大人になるにつれ読む機会がなくなってきていませんか？学生という忙しい日常生活の中で本を読む時間はありますか？

今回、私たちが本を読む理由と本を選ぶ基準について話したいと思います。

まず私たちが本を読む理由は、想像力が豊かになり、たくさんの知識が身につきます。また、疲れて

いる中で、気分を変えるためのリフレッシュ効果があるからです。

次に、本を選ぶ基準についてです。自分が興味を持った本なら最後まで読みきることができるし、何より自分が興味を持たなければその本を理解し、楽しむことができないからです。

大学生になって改めて本のことについて考えることができました。本を読むということは、とても大切なことであり、これからの人生の中でも役に立つと思うので時間を見つけて、いろいろな本を読んでいきたいです。



— 本との巡り合い —

短大：1B 石田知恵子

この世界にはたくさんの本があり、あなたの周りには素晴らしい本であふれています。その中で、どのような本と出会いましたか？そしてどれくらいの感動をしたり、笑ったり出来たでしょうか…。

なぜその本に出会い、なぜその本を読みたいと思ったのか。それは今現在のあなたの「心」そのものなのです。その本を読んでどう感じたか、何を思ったのか。もし同じ本を自分以外の誰かが読んだとしても、違う感想をもつでしょう。そのように本には、人の心を動かしたり、左右したりする不思議な力を

持っています。

私自身も本は好きで、特に詩集本に心が惹かれます。また、皆さんにもぜひたくさんの本を読んで、心の豊かな人になってほしいです。いろいろな本と出合って、いろいろな人と会話して、そしたら心が和むでしょう。たった一つの本だけで、ある人の人生が知れたり、また、違った方向からの見方で、自分の考えが変わったりするのです。

心にぐっと来る本と巡り合って、今の人生を変える第一歩にしてみたいかですか？





— 心に残る1冊 —

大学：2A 内田翔太郎

読書をしていると、日々の生活の中にあるポテンシャルを引き出す力を感じることが時々ある。それはふとしたセリフやストーリーそのもの、比喩表現の中にそっと潜んでいる。

例えば、この前読んだ本の中で主人公が彼女の横顔を見て、「おぼろな月が霞にけぶるかのようなそのたたずまい」と表現するシーンがあった。この本を読んでから私は、実生活で好きな人の横顔を見る時、心拍数の上昇が三割増になった。

読書を通じてこういったことを感じるたび、見ている対象は同じなのに、どうしてこうも違う物の見方が出来るのだろうかと驚く。また同時に生きることに少しだけ前向きになる。そして私は気付く。世界への無関心さが私を憂鬱にさせるということ。読書が私の眼を世界に向けさせるということ。

読書をすれば人生が変わったり、毎日が楽しくなるなんてさすがに思わない。けれどもこういうことを考えるとき、しないよりはした方がいいと思う。



— ファンタジーについて —

大学：4A 浅川真美

皆さんはファンタジーというものをどう思っているだろうか。

私がファンタジーに惹かれるようになったのは中学校の頃、ミヒャエル・エンデの「はてしない物語」を読んでからである。あれほど胸を高鳴らせながらページを捲ったのは初めてだった。生き生きと動き回るキャラクター、神秘的な描写、ミステリーとも思える構成…まさに終わりのない物語だった。

それから何度も読み返したが、そのたびに違った表情をみせるのも魅力である。ある時は異世界への

憧れに浸り、ある時は少年のアイデンティティの確立を見守り、またある時は生と死、破壊と創造に関係性を考える。ファンタジーにはとてつもなく深いメッセージが込められているのだ。そしてそれをどう読み解くかは読者の自由なのである。

ファンタジーは子どもたちだけのものではない。児童書に分類されることが多いが、決してただの夢物語ではない。現実社会に生きる人たちにこそ読んでいただきたいと思う。



★ 統計資料 ★

単位 / 冊

		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術	産業	芸術	言語	文学	合計
蔵書数	新規	10	31	1	397	52	26	19	22	2	54	614
	総数	993	4,143	563	14,559	6,032	709	119	1,293	1,242	2,118	31,771
貸出冊数	学生	4	528	24	1,390	165	75	16	189	44	306	2,741
	全体	15	588	56	1,584	208	80	18	246	61	385	3,241

図書館からのお知らせ



★ 2009年4月1日より
県内図書館の資料を
借りられるようになりました！

リクエスト(相互貸借)用紙

受付№

2010年 1月12日(火)

氏名	学籍番号 : 000096 昌賢太郎	必ず連絡が付く、連絡先(TEL) 090-XXXX-XXXX
【備考欄】		

書名	1Q84 : 1巻		
著者名	村上春樹	出版社	新潮社
		ISBN (10桁 or 13桁)	4-10-353422-2

..... (ここからは、図書館で記入します。)



県立図書館の協力車が、第2・4木曜日に巡回にきます。
時間にゆとりを持って、お申し込み下さい！
(手続きに時間がかかる場合があります)



上記の申請用紙は、入り口周辺に用意してあります。
詳しくは、カウンターまでお尋ね下さいませ。

編集後記

図書館報第16号をお届けします。

今年度は県内図書館相互協力へ参加に伴い、県内を巡回している協力車を利用した相互貸借が可能となりました。第2・4木曜日に県立図書館の職員の方が依頼した資料を届けてくれるので、ぜひ一度相互貸借を体験してみたいかがでしょうか。また、今年の夏休みには図書館ボランティアの協力を得て、大掛かりな書架の移動を行うことが出来ました。資料の探しやすい見出しになっていければ幸いです。

最後に図書館報の発行にあたり、お忙しい中原稿の執筆をしていただいた方々に心より感謝申し上げます。

(図書館)